

福岡県唐泊地方の労働着について

からとまり

九州女子大家政

藤弘洋子

〔目的〕 ドンザと呼ばれる労働着は、日本の各地に現存している。福岡市西区の漁村、唐泊地方に現存するドンザは形態的には他の地方のドンザと同じ形態であるが、裏裁や刺し方にやや特徴がみられるので、今回はそれらについて考察を試みる。

〔調査項目〕 1. 唐泊地方の地域性について 唐泊は江戸時代に回船業を許された筑前五ヶ浦の一つであり、明治時代になって漁業を専業とすようになり遠洋漁業にも出た。

2. 裏裁について 太いたて縮が多く用いられ、白の木綿糸を二重にしてよこ刺しにすることにより、デザイン的な妙味を表現している。つぎはまのドンザもあるが、表地、裏地ともつぎのない新しい布を用いたものが多い。

3. 単衣仕立てのドンザもあるが、衿仕立てが多く、袴下から裾にかけて縁取りがなされている。(縫製順序を示すものといえる。)

4. 刺し方は、針目間隔も刺し間隔も広く、補強や保温を目的とすよりもむしろ、デザイン感覚が主体であったと考えられる。

〔まとめ〕 1. 地域的に隣りに近いということと、隣村の宮ノ浦地方の人々は隣りの人々と婚姻関係をもっていたことから、隣りの「着道樂」のオシャレ感覚がドンザの刺し方に多分に影響していると考えられる。

2. 構成法として身丈に必要な布をついで刺しをするのでなく、刺しをした部分の表布と裏布とで肩から下の布をはさみ縫いをすす特殊な構成法である。